In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	陶淵明文学の源流を探る
Author	橋川, 時雄
Citation	人文研究. 5 巻 6 号, p.448-480.
Issue Date	1954
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

陶淵明文學の源流を探る

橋川時雄

あらすじ　この小篇は、陶淵明のことについて書いた「箋陶篇」IIの序説である。前篇の『箋陶篇』Iは彼の歴史を問題にして書いたものだが、彼が遺した詩文の半ばは、その評釈をつけながら評伝論証の資料に使つた。本篇は、彼の文学自体がもつ創造性表現性などに及ぶものであるが、前篇でつけておいた彼の詩文は、すべて拾遺し、評釈して、断翰零墨も余さないでその題材に用いられるであろう。

彼淵明の文学製作、その業蹟も、所詮は、時代の所産である。その時代の文学がもつ創造の力、その型体、素材のえらびかた、それを表現する手法などによつて創りだされたものである。時代の力がはたらきかけているとは云え文学作品の創造は、機械製品をつくる様なわけにはいかない。彼淵明の詩文にしても、その本質からみて、彼の生涯において二度と同じ作品をくりかえして創れないし、その文学的業蹟とても彼の時代の一期しか書きあげられないたちのものである。しかも彼が生きた時代の一時期に創られた彼の文学には「彼の歴史」以前の時代からの継承がある。彼の作品を読み、これを評釈鑑賞し批判するわれわれには、「彼の歴史」以後に接続する時代が与えられている。この歴史性を見逃がして彼の文学を語ることはできない、彼の作品を評釈することもできない。彼の作品には、彼の時代における作者グループのなかでも時代を超えた著しい長所と特異な地位が後になつてみとめられただけに、なおさらこの見どころを決めてかかること

が大事である。

そこでおぼろげながらも、彼の文学がふみだした発足点、文士詩人としての彼の業蹟を創りあげしめた祖型の所在、それを胎動させた母体と見られる作者を「彼の歴史」以前の時代に探りもとめるしごとを先決とする。

彼の作品の受売者、評釈者、批判者と彼との時代的距離などの問題はしばらくさしおくが、前にのべたような探源工作はけつして容易に解決される問題ではない。それが推説や比定のままで取りのこされたとしても、彼の歴史とその時代考的文学業蹟についての論が展開された場合にその歴史性文学性のどの点とも矛盾や抵突を起さなかつたならば、その推説が単なる推説でなく、その比定がおよそ確かであることを知ることができよう。またこれは、彼の「桃花源」の一句を借りていうなら、豁然開朗する「陶詩源」から彼によつて開拓された詩文の全野をながめて立つまでには、どうあつても経過しなければならない奥の細道である。ここで私は前篇で、彼の歴史をたどつた場合にも、その曾祖陶侃をふみ台とみとめてそこから歩みだしたことを思いだす。

いわば、「彼の歴史」以前の時代の作者或いはその作品のうちに、彼の文学の序曲とみるにふさわしいものをもとめ、そのほのかな光に誘われるままに、また見知らぬ世界にすすみ入り、その序曲の交響がはたとやむところに、高くかつ大らかにかがやいた、彼の文学の金字塔を望むことができよう、と私は本篇で意図する。

陶淵明の文学は魏の作者応璩から出ているということ

陶詩源の問題

二世紀末から六世紀にかけての魏晋南北朝（漢、建安一年196——隋、開皇一年581）は、その時代を通じて、政治においては、統治の力と秩序が見失われ、王朝統治者の更代と対立、その領域の変化がたびたびくり返され、また世相からみても、動揺から騒乱への疲労で世紀末の暗さを思わせる。史書にもそのように書かれているが、その時代を反映したその文学の世界は、各王朝の首都でも、各州郡の城下町でも、わりに明るい、はなばなし

い、希望的な活潑な活躍ぶりが展べられていたかに見える。というのも、その時代は、政治と文学とを直結したかたちで統治者支配者の顔はそのまま文学事業の指導者、協力する「朋友」として詞壇にも登場するといつたように、何ものよりも作者とその文学を必要としていたからでもあろう。そして、今までの遊侠的気分をいくらか英雄的詠懐のすがすがしさに、その知識をたかめその思想を深めたものに書改めていこうとする気運が、すでにこの時代の発頭においてみなぎつていた。それゆえに魏の曹操父子やその膝下にあつまつた建安七子たちの詞壇は、いちはやくかがやかしい業蹟を築きあげている。いうなれば、五つの文字を一句にした詩型「五言詩」の一体はこの時代においてもつとも高度に活かされ、「詩」の文学は新たに定型づけられた。その作者群のあいだでは文学詩文のありかた、そのよさ、その手法までが話題となつてその優劣についての批判や評論が作者の創作活動と並び馳せる趨勢を造りあげている。それが魏晉を過ぎてこの時代の後期南北朝になると、古今の作者系列をかかげて、時代的評論、分析的批判をくりひろげてきた。そして個々の作者間にある時代的繋がりからその淵源師承の関係も見出して、文学史的地位の品定めにまで至らしめた歴史がみられる。

彼淵明は、この時代の中ごろ、文学史的にもこうした前後両期にはつきりと分岐しかけた時代風潮のなかに出た作者である、と云う点で意義が深い。だから彼は、「彼の歴史」時代では、さほど目立つた存在でなかつたが、のち一たび後代の文学評壇に立たされるや、たちまちにして、もつとも秀抜な、特異な埋められていた珍宝が発掘されたごとく時代を超えた高い地位に推されたのである。

私たちは、彼が亡くなつてからほぼ一世紀をへたてて梁の作者鍾嶸が書いた『詩品』三巻のうちで、彼を中品すなわち中級作者と地位づけ、彼の五言詩にたいする源流とその詠みぶりを詳らかにした記録にまず目を注がなければならない。

陶淵明の五言詩についていうならば、その源は、魏の作者「応璩」から出ている。そしてまた、西晉の作者「左思」の詠みぶりと、同じ句調手法が見られる。彼の作品では、詩体は小さつぱりと整えられて、とくに長篇の作と云つたものはほとんど見出だされない。その思想も誠実で、「古の作者」をおもわしめるゆかしさがあり、その詞藻もゆた

かでこまやかに美しく表現されている。私は彼の遺作を読むたびに、「徳の人」としての彼の人間像を想見せずにはおれない。その「山海経をよみて」の句に、

『よろこび言いて、春の酒を酌む』。またその「擬古」の作のなかに、

『日暮れて、天に雲なし。』

と詠まれた句の如き、風情清く才華みやびて、田園生活の環境での叙懐とは承けられないほど土臭みがぬけている。この作者には何と云つても、古今を通じての隠逸詩人の王座に坐らすべき資格がある――と評賞のことばをささげたい。

陶潛――其原、出于応璩。又協左思風力。文体省淨、殆無長語、笑意真古、辞興婉愜。每観其文、想其人徳。至如『欲言酌春酒』、『日暮天無雲』、風華清靡、豈直為田家語耶？古今隠逸詩人之宗也。　梁鍾嶸詩品巻二

鍾嶸の『詩品』はこの時代の文学批評書として梁の作者劉勰の『文心雕龍』と並び称せられた本であるが、その批評圏が、五言詩に限られているせいか、その所見ははじめからさほどたかく買われていない。が彼淵明に関する品定めだけは、後の作者たちの注目を引いて、彼のごとき偉大かつ異彩ある巨匠が中品の級におかれていることにたいして、また彼の詩句が、応璩のごとき後の読者にはその名も知れていない作者に淵源するという、損われた彼の名誉のためにすこぶる憤りと不満が表示されている。この抗議は、彼淵明にたいする敬愛からきた感情だけのものにすぎないが、このことは鍾嶸が彼を中品の級においたと云う承服しがたい理由を見究めようとせず、『詩品』そのものの評価を低からしめた理由の一つになつている。

註 1　私の見た「詩品」の巻末、明の毛晋の跋に「六朝作者、各自專工一体、後来争相祖述、故云、「某出于某也」。至若靖節先生詩、自写其胸中之妙、不屑于比擬、乃謂其出于応璩、不知何拠。豈以靖節、述酒諸篇、悼国傷時、彷彿百一詩、託刺在位遺意耶？」とある。六朝の作者たちは、ある作者の一体についてもつぱらその手法を学んだので、それで「某の詩は某に出ず」と評された。

彼淵明の「述酒」などの語句には、応璩の「百一詩」に見られる当路者にたいする諷刺がうたわれているところに、両作者の詩句に親近が感じられる。と云っているが、それを源流関係にまで結びつけて説明することはできない。

註 2 「四庫全書総目」の梁鍾嶸の撰「詩品」三巻の提要に「每品之首、各冠以序、皆妙達文理、可与文心雕龍並称。近時王士禎極論其品第之間、多所違失。然梁代迄今、邈歴千祀、遺篇旧製、什九不存、未可以掇拾残文、定当日全集之優劣。惟其論某人源出某人、若一一親見其師承、則不免附会耳。」とある。梁には応璩の遺作が全集本でよまれていたと云うことも、独断に近い。

近く文学革命の口火を切つて白話文学を提唱した胡適(1891-)は、その『白話文学史』で、完全な白話詩人陶淵明をとりあげている。そして白話詩諷諧詩の作者としての応璩の作「百一詩」から彼淵明の白話詩諷諧詩につらなる文学史的趨勢があることを語つている。この意味で『詩品』の著者は彼淵明にたいして十分な敬意を払つていることを強調して、これまでの『詩品』読者の批判にむくいている。

鍾嶸は彼淵明の名を中品作者に列ねてはいるが、その実この短評でも十分に彼を推敬している。「その詩は応璩、左思に出ず」の説にもいくらかの理由が考えられる。応璩は白話の諷諧詩を作つたもので、左思にも白話の諷諧詩がある。彼淵明の白話詩では、その「子を責めて」「挽歌」など、諷諧文学としてのみ読むことができる。だから鍾嶸は彼の詩句は応璩に出ず……と書いたのである。その実彼の詩句は彼の天才と環境での所産で、かの「拙稺で書生のことばつきに似通つた」応璩が蜚の詩作とは、必ずしも淵源関係をもつのでない。六まかな歴史の趨勢から見たばわい、民間の俗謡から作者応璩・左思、程曉たちの創意で作られた諷諧詩にいたる、そしてまた「拙稺」な応璩の「百一詩」から「天然で雕飾をたくまない」陶淵明の詩句に歩みつつあつた趨勢は、まつたく歴史の偶然とはいいがたい。彼らはすこぶるはつきりと、中国文学史が勢のおもむくままにたどる自然的動向があることを認めさせる。それはほかでもない、白話文学がたくましく前進する趨勢である。この趨勢は制止しきれるものでもない、「聖主が賢臣を得たる頌歌」を作つた漢の王褒であつたが、あとでは白話で『僮約』を書いたし、「三都賦」の作者左思も、あとでは

白話で「嬌女詩」を作つた、かの駢麗対偶化された詩体がもつとも盛んに一世を靡かせていた時代でも、完全な白話詩人陶淵明を登場させたということ自体が、いうまでもなく、かの白話文学の生動は何びとも長く抑へきれるものでないことを証明して、十分である。

ついで胡適は、陶淵明の白話の句例として「園田の居に帰りて」「飲酒」「山海経をよみて」など十首彼の詩集からえらび抜いている。〔この文は『白話文學史』上巻、「唐以前」（三〇〇―六〇〇）にある、いまその原文をはぶく。〕「白話」とは、国語あるいは北方語を基礎とする共通語のことである。白話文学（文学革命）の提唱者がいう「白話」は、中国人たちにあまねく通用される「国語」という意味をもち、白話文学の提唱は明日の「国語の文学」の創造をめざす言文一致運動であつた。応璩の「百一詩」も陶淵明の詩句も制りやすい平易な文語体ではあつても、これをただちに口語体の詩と云うことはできない。さらに、諷諧、諷刺ということは、おのずから中国の文学、なかんずく「詩」の文学が本質としてもつた性格であり、詠懐でもあつて、それが作者未詳時代の民衆の口からでた語体俗謡の原始には考えられたとしても、いつも白話語体とのみ道伴れであつたという歴史はない。また彼の詩句は、対偶化の風潮をあびた時流作者と列をなして大雅の堂に登るには野趣が多過ぎるが、口語体の白話詩としてよめるものは一首も見出だされない。かつて白話詩人とうたわれた「白話文学史」の著者は、今でも応璩・左思――陶淵明――胡適にいたる系列が直線で結ばれている、詩歌のありからみれば三詩人の距離も零である、と思つているだろうか。

ここで私は読者に、すなおに鍾嶸『詩品』の評句をよんでみた感想をきいてもらいたい。これはわずか十四五句の短篇である一篇の「陶詩源」としてまとめられた、古文の雅味もある小品である。陶淵明の人物とその詩句とのあいだに不可離なものを見出して、その生活は田舎家の低きにあつても、その詠懐に表現された思想は隠逸世界の高きにあつたことにたいし賛詞をささげている。この句境から知られることは、今の『詩品』が彼を中品の級においているのは、著者鍾嶸の創意であつたとは思われない、そこには覆面した一人の偽作者がその原本に加えたたくらみがあるのではなかろうか、と

いうことである。

今一つ読者に話しかけておきたい。彼の詩句にたいする最初の、そしてもつともきまじめな批評者は鍾嶸である。そのことばは彼の詩句に対する周到な考証と文学に対する一つの定つた典型を見極めて評価したものである。だから、これは五言詩の圏に限られているとしても、その実彼の文学の全野に通ずる評論と見らるべきであろう。ところが、その『詩品』と並び称せられてきた劉勰の『文心雕龍』は一言半句も彼の詩文にふれていない。偉大な詩人陶淵明はその宝典に一とも登場して来ないのである。不可解というほかない。このなぞは誰がといてくれる。

應氏と汝南の詞壇　この時代（魏晋南北朝）の文学では、作者たちははじめから「五言詩」の一詩型がもつ性能持味を高度に発揮しようとしていた。その努力は七言詩が形成された次ぎの時代までたゆまなかつた。が鍾嶸の『詩品』を書いたころには、梁・昭明太子の『文選』に示されるように、文学の型式からみた網の目にすこぶる多彩な派出がみられる。その手法から云つて、文字がもつ性能、――文字の形音義、対句、四字六字の句調、音調の諧和美典故の繁用などを過度にはたらかして駢儷対偶化することに浮身をやつす作者たちが、往昔の統治者の膝もとに群をつくり、宮廷台閣の文学で幅をきかしていた。そのうちに江南の開発が進められて富がゆたかになり、今まで支配階級に独占されていた文字が一般社会の職場にも普及してくると、いくらか文字に通暁する平民たちにも判りやすい、はたらく平民のための文学が要請されるようになつた。この風潮のもとで、宮廷や統治階級をめぐつてひたすら駢儷対偶化をたどる文学の創造性に疑いをもち、その動向を嘆いていた作者、統治者の膝もとでは政治上の地位もあたえられず、仲間に牽制されてその群では失意な作者たちは、魏晋時代の素樸ながらも健康な文学に思いを寄せ、それにむかつて復興の気勢をあげる。そして社会一般の要請に応うべく、判りやすい文学を唱導することで、時流の作者に抵抗したのである。そうした作者の一人として『詩品』を書いた梁・鍾嶸の名が浮びあがつてくる。

陶淵明の曾祖陶侃は、その史伝で知られるところでは、儒家的教義の拘束感に稀薄で、折翼の夢などに神経をなやまさ

ないであつたならば、一王朝の開始者となりえたにちがいない。そうした場合、彼の文学とその地位がどうしたものであつたろうか。鍾嶸の『詩品』に前掲のごとき賛詞をうけなかつたことだけはたしかである。

ひるがえつて鍾嶸たちが復興をめざした魏晉時代の文学とても、文章と政治とは呼吸を共にしていた。作者と門閥とは背中をあわしていた。そしてその文学の型体も素樸で遊侠一点張りで、有韻の詩歌を「文」、無韻の散文を「筆」と、この二つのけじめを意識していたにすぎない。もつと事実についていうなら、この時代の文学の縞模様は、「五言詩」がもつともあでやかな大すじとして織りだしている、それに書記文学という裏ずけがあつた。書記文学とは廣い意味今の公文書を書くしごとで、いわゆる刀筆の吏を資格ずける「筆」の文学である。鍾嶸の『詩品』で批判評価の対象としてとりあげている五言詩は、「文」の有韻文学の作品を代表することは云うまでもない。その五言詩には、強きをくじき弱きを助ける遊侠の背骨が通つている。それが上にある統治者支配者の政治にたいする下にある民衆の怨嗟諷刺の古詩精神とおのずから相結ばれて、作者の詠懐は平民が職場でうたう詩歌へ、判りやすく生活労働からきた疲労を慰める平民文学への動向をたどらしめる。それにたいして統治者支配者をとりまく作者たちはますます駢儷対偶の古墨をかためて、美辞麗句を特色とする判りにくく読みがたい文学にはしる。それが書記文学にも投影して、今までは刀筆の吏になる資格を得るための文学から、自分の胸にたくわえられた幽憤のあるかぎり、腹ふくるるものは皆吐きだし、また来しかたを顧みての感慨を語りあい、自叙伝的な書翰文、書きのこすための作品となる。この点では、文学の諸型体を一様の縞模様とみて、その比重も考えないで書いた劉勰の『文心雕竜』のごとき評論にたいしては、『詩品』の著者は文学の正宗的前進をはばむものとして憤りを表明してる。

つぎに、「陶詩の源は応璩に出ず」――の「陶」は個の作者彼淵明であるとしても、「応」とは個の作者応璩と了承するわけにいかない。応氏の門閥と汝南郡城に築かれた汝南詞壇の上に浮びあがつた、実在人物であつて偶像でないたちの応璩と見てよい。そしてまた、「陶詩の源は」と打ちだされたことばは、直接には彼の五言詩をさしていつているが、後

の陶集編訂者が各巻にふりあててまとめた彼の四言詩をはじめとして、五言詩、賦・辞・述・賛の有韻文学も、伝・記・書・疏・祭文体の散文作品もそのすべてをふくみ、彼の文学全斑を意味するとみても、それは著者鍾嶸の創意にもとる読みかたにはなるまい。

応璩の事蹟はさほど詳らかでない。その遺作で今日伝うるものは梁・昭明太子の『文選』に「百一詩」一首があるほか、いくらもない。彼は建安七子の一人に加わつた応瑒を兄として、その子に応貞がある。三人ともに詩名をうたわれた作者で、彼の官は侍中に至つた。応氏は汝陽郡でも読書の伝統も古い世家である。汝南応氏の文学は、応瑒・応璩の兄弟になつて、前には父祖の伝統をうけ、後には応貞たちを出して、汝南詞壇を築きあげる。汝南は河南省の汝寧・陳州の二府から安徽省の潁州府にまたがる地域を占めた郡名で、その故城は今の汝南県にもとめられる。後漢の末期献帝の建安（196—220）から魏（221—264）にかけての汝南詞壇は、今の河南省臨潁県内に比定される鄴都において、魏の曹操父子のもとに集つた建安作者たちによつて主持されていた中央詞壇とは、程近くに相呼応して、一郡の文学を誇示していた。だから応瑒、璩の兄弟も、建安文学の時代圏にあつた作者で、その句懐詠みぶりにはいくらか個性的な異調が作者たちの話題にのぼつていたにすぎない。

註 1 応氏兄弟および応貞ら事蹟とその文学については〔魏志〕の王粲傳に附記されている、またその劉宋・裴松之の注に少しくやや詳しい。

瑒弟璩、璩子貞、皆以文章顕。瑒官至侍中、貞咸熙中、参相国軍事。

——魏志巻二十一、王粲傳附

文章敍録曰、璩字休琚、博学好属文、善為書記。文・明帝世、歴官散騎常侍、斉王即位、稍遷侍中、大将軍長史。曹爽秉政、多違法度、璩為詩以諷焉。其言雖頗諂合、多切時要、世共傳之。復為侍中典著作、嘉平四年卒、追贈衛府。貞字吉甫、少以才聞、能談論、正始中、夏侯玄盛有名声、貞常在玄坐、作五言詩、玄嘉玩之、挙高第、歴顕位、晋武帝為無軍大将軍、以貞参軍事。晋室踐祚、遷太

子中庶子、散騎常侍、秦始五年卒。貞弟純子紹、永嘉中、為黄門侍郎、為司馬越所殺、純弟秀、鎮南大将軍、江州刺史。

——魏志王粲傳裴注

註Ⅱ　汝南応氏の諸人物の事蹟とその学藻については、『魏志』の王粲傳および、その裴註に次ぎのごとく、増補されている。

始文帝為五官将、及平原侯植、皆好文学、粲与北海徐幹字偉長、広陵陳琳字孔璋、陳留阮瑀字元瑜、汝南応瑒字德璉、東平劉楨字公幹、並見友善。…瑒転為平原侯庶子、後為五官将文学。

——魏志王粲傳

華嶠漢書曰、瑒祖奉、字世叔、才敏善論説、故世称応世叔読書五行俱下、著後序十余篇、為世備者。延熹中、至司隷校尉。子劭字仲遠、亦博学多識、尤好古、諸所選述、風俗通等凡百余篇、辞雖不典、世服其博聞。続漢書曰、劭又著中漢輯叔漢官儀及礼儀故事、凡十一種百三十六卷、朝廷制度、百官儀式、所以不亡者、由劭記之。官至泰山太守。劭弟珣字季瑜、司空掾、即瑒之父。

——魏志、王粲傳裴註

『魏志』の王粲伝に附けられた応瑒らの事蹟とその裴松之注に引かれた史伝、および『晉書』の応詹伝の記録によつて、汝南応氏の世系を次ぎのごとく図示することができる。

この汝南応氏の家系図の示すごとく、魏の鄴都に曹操父子を主盟とする中央詞壇が形成された時代には、これに呼応して応氏の作者によつて主持された汝南一郡の地方詞壇が建安文学の附属として出来あがつていた。そして汝南詞壇はほかの郡城にも形成されてきた各郡の彗星詩壇と相擁していたが、その時代の文学において、汝南の政治的影響力とその門閥の主持を無視することはできなかつたし、王朝が革命されて曹氏の魏（208—264）が西晉（265—316）東晉（317—419）の世になつても、汝南に応貞・応詹のごとき政治的手腕と文学的才能に恵まれた人物があるかぎり、汝南詞壇はなお健康に持続されていたのである。

淵明の曾祖陶侃が潯陽に根城をかまえてから彼の時代に及ぶ距離は短かい。そして陶侃の卒後は陶氏の同族間のもつれでその一族の收束がつかないで、たちまち門閥の崩壊をきたしたのであるから、彼には陶氏の作者によつて支持される潯陽詞壇というものがなかつた。としたら、「陶詩の源は応璩に出ず」——という淵流師承の関係は、なお時と地の隔差がある。応・陶両氏とその文学のあいだにある歴史的交渉と今一つはその時世の差のほかに、魏の応璩から東晉の後期に生れて劉宋のはじめに卒した彼に及ぶ時代における文学史的風潮とにもとめられねばならない。

汝南応璩たちの文学がどういう経路で、どういう手続で、文学史的風潮に載せられて潯陽の彼にむかつて何を流したか。この問題について、胡適教授がとりあげた白話詩諷諭詩という歴史的動向ではなくて、何か他の淵源流関係が見出だされないだろうか。

建安作者応璩の詠懐　応璩の兄瑒も加つた鄴都詩壇の七人作者では、阮瑀は建安十七年（212）に、王粲は同二十一年（216）に卒世、同二十二年（217）の悪性流行病で応瑒・徐幹・陳琳・劉楨の四人が斃れた。魏の文帝曹丕の「呉質にあたえた書」には、中央詞壇の七つの支柱がくずれた昔日の悲しい思出が述べられている。その後の鄴都詞壇は文帝や曹植（字は子建）明帝曹叡のもとになおふたたび陣容をととのえたのであるが、汝南詞壇は応瑒の弟璩によつて主持され、

いささかもその衰えを見せなかつた。文帝は「呉質に与えた書」で「その詞才は裴然としてかがやけるものがあつた、その学才は著述をなすべきほどに六きかつたが、その文章の志業をなしとどけないでしまつたのは痛ましい」と応瑒の遺藻を追惜している。

註Ⅰ 応瑒の文学については『魏志』の王粲傳とその裴松之注に引いた『典論』に次ぎのごとく記さる。

幹、琳、瑒、楨、二十二年卒。文帝書与元城令吳質曰、昔年疾疫、親故多離其災、徐、陳、応、劉、一時俱逝。観古今文人、類不護細行、鮮能以名節自立。……、徳璉常裴然、有述作意、其才学、足以著書、美志不遂、良可痛息。……昔伯牙絶弦於鍾期、仲尼覆醢于子路、痛知音之難遇、傷門人之莫逮也。諸子但為未及古人、自一時之傑也。

——魏志巻二十一王粲傳

典論曰、今之文人、魯国孔融、広陵陳琳、山陽王粲、北海徐幹、陳留阮瑀、汝南応瑒、東平劉楨、斯七子者、於学無所遺、於辞無所仮、咸自以劣騏驥於千里、仰斉足而並馳。……応瑒和而不壯。

——魏志王粲傳裴注

註Ⅱ 『文心雕龍』の「時序篇」に「徳璉其裴然之思」とある。また「於時正始余風、篇體輕澹、而稽阮応、繆、並馳文路矣」と応瑒に及んでいる。（清黄叔林の註に、「応」下に「瑒」と注されたのは誤）また同書の「明詩篇」に「文帝陳思、縱轡以騁節、王、徐、応、劉、望路而争驅。並憐風月、狎池苑、述恩榮、叙酣宴、慷慨以任気、磊落以使才、造懐指事、不求纖密之巧、駆辞逐貌、唯取昭晰之能、此其所同也。」とある。また『文心雕龍』の序志篇には「応瑒文論……応論華而疏畧」とあり。その黄叔琳註に、「応瑒集有文質論。」とある。彼に『文論』の著述はない。『芸文類聚』巻二十二に引かれている応瑒「文質論」をさして云つたか、その「文質論」はただ文質の配在よろしきを論じたもので、「華を論じて疏畧」とは何の意味か判らない。

この小篇を書くために劉勰の『文心雕龍』は何ら役に立たない。この文学至典は、その取材においても、またその評論においても、彼のことばを借つていうなら、彼以前の作者の所論をもじつて「辞を仮り貌を逐う」やりかたで、併儷対偶と云う美しい錦套に装訂された手法をのべた著述にすぎない。しかもその取材評論にしばしば引用の錯誤が犯され、一条として彼の創見、未知の題材は見出されない。と云うことを読者に知つてもらうために、この小篇ではこれから同書の引用を掲註してその錯誤を正しておく。

前掲の魏の文帝の「呉質にあたえた書」のうちにも、「古今の文人をみるに、おうむね細行を護らず、よく名節を以て自ら立つ、鮮し」とある。これは七子たちの作品が、素樸な、遊俠はだの文学から、毅然として「名節」で立ちあがつた作者への書改め、いわゆる「風骨」「風力」の用語にふさわしい新しい詠懐を展開した建安文学の成功を物語つている。その七人の作者のうちでも年輩の若かつた応瑒の詞藻と学才にたいして、さらに一歩を前進さすべく最も望みがかけられていたのであつたが、早世したためにその事業をなしとげないで終つた。だから『隋書』の経籍志には「応瑒集」及びそのほかの著述が載せられていない。彼の詠句で完全なかたちで遺つている作品は次ぎの二つである。その一つは、『魏志』の記録によると、魏王曹操がその子曹丕に命じて五官中郎将たらしめたのは建安十六年の正月で、そのときその「文学」として従つた応瑒の「五官中郎将建章臺の集に侍べる詩」一首が『文選』によまれる。

朝雁鳴雲中。音響一何長！問子遊何郷？哉翼正徘徊。言我塞門来。将就衡陽倦。往春翔北上。今冬客南淮。
遠行蒙霜雪。毛羽日摧頹。常恐傷肌骨。身隕沈黄泥。欲因雲雨会。濯翼陵高梯。良遇不可値。仲眉路何階！
公子放愛客。楽飲不知疲。和顔既以暢。乃肯顧細微。贈詩見存慰。小子非所宜。為且極欲情。不醉其無帰。
——文選五郎中郎將建章台集詩

読者もし、続高らかにこの一首を諷誦して見るならば、愴々として建安風気のうちに吸いこれ、その「裴然」の才思に驚歎されるであろう。また「和であつて壮でない」という評句にもうなずかれるものがあろう。彼はこの一首の労作を遺しただけで早世したとても、悔いはあるまい。いまその初めの一くだりを読みかえして見よう。

朝ぼらけ、蕊がそびえている建章臺えとゆく途で雲のなかから雁の鳴声が聞えてくる、その声は、何と哀れぽい音で私によびかける。

『お前もまた羈旅のひとなのか、故里はどこのなのか、遠くから飛んできた疲労を、しばし安めようと、翼をおさめて、いま雲間にさすらうているのか。』

と、宮人が朝雁に発問する。つぎに縷々として帰雁の答歌がうたわれている。この一首には、宮人応場が建章臺の「文人高会」の雅宴で詠んだだけに、造句のみやびさ、格調のかたさもないではないが、彼淵明の詩句でも、「いこいの宿」を求めてさすらう帰鳥を作者自身にたとえた同じ比喩で、同じ手法で詠まれたものが多い。また末の一くだりになると、たしかに「細行を誕らず、名節できそい立とう」とする遊俠的豪情をぬけきらない建安作者の活動ぶりがうつろうている。そこには彼淵明の詩句の末段でよまれるごとき、自己を克服した深みと高さをもとめることはできない。その帰鳥はしばしその翼をやすめて、また遠く旅だつ態勢がみられる。

今一つの「霊河賦」は、『古文苑』（巻二十一）に読まれる。（『初學記』巻六、『藝文類聚』巻八にも見ゆ、その字句には多少の異同がある）　ここではその全句をかかげることをよそう。前作と同よう、格調を整えた短篇であるが、黄河河源を追うた夢物語がうたわれている。おそらく黄河のほとりでの築隄工作の竣工を祝福し、これを記念するために作られ、或いは句碑に刻まれた文字かも知れない。この工事のために多くの農民たちに賦役を強いもしたが、それがあつて後は、洪水の禍に襲われる心配はない。なおまた河畔には樹木の茂みもこまやかに、清風をそよがせ、白波をただよわせて、新しく築かれた隄を護つてくれるだろう――そこには自然風景が写しだされているばかりでなく、これを築くために提供した百姓の苦役にむくい、彼らの田園における労苦を慰め、これから後の増産も祝福されている。また一本の記載（『北堂書鈔』巻百三十七）によると二句を増して、やがては越の舳蜀の艇も支流にそうてつどい来て、物資の交流が廣域に及ぶことであろう。すれば、それが君たちの富を増さしめることにも、君たちの文化をたかめることにもなろう――とどこまでも民生開発事業にそつて、農民や一般文化の啓蒙のためによびかけてうたつた作者の創意が酌まれる。もつともその造句はよほど文字に通暢したものでなくては解しえられない、農民庶民にはとうてい判らない詩句ではあるが。

この小賦で示された句境は、前掲の五言詩の句境とも通ずる。建章臺へと急ぐ途上で、帰雁の哀音に耳をかたむける。帰雁は賦役に苦労して故里にもどつてきた農民の影子でもあろう。また賦役で遠く徴せられた夫から故里の田園ではたら

いている婦女たちに消息をもたらす使者でもあろう。作者みずからが羈旅の人という点で、ともに相語らい、相慰めあつているあたり、建安作者の詠句は、その用語は解しがたいとしても、その創意は平民たちの職場とも相通ずるものがある、その職場ではたらきながらうたうにふさわしい労働歌の風情が詠まれている。

この句境にはまた彼淵明の物語文学に展べられた場面に相通ずるものが見出だされる。彼の物語集『搜神録』に載せられた「桃花源」（彼の詩文集、および後の偽作『搜神後記』に載せられる）は武陵の池堤工事との関聯で生起した物語であり、梁釈慧皎の『高僧伝』に引かれている『搜神録』の「白土埭で過つた三人の異法師」は廣陵における土木工事の指導者を主人公とする物語である。これは汝南応氏が黄河のほとりで詠んだ「靈河賦」が江南の武陵、廣陵から伝えだした物語をとりあげて書いたもので、江北における開発事業が一応終りを告げると、それが揚子江をわたつてそれ以南に展開された時代の歴史が考えられる。（『箋陶篇』附録のⅢ「五柳先生物語集」に詳し。ここではその考證をはぶく）詩句と物語とその型体は変つていても、その文学の世界はともに百姓平民の職場によびかけ、民生の開発、文化の啓蒙を基調としている点でも相通ずるものがある。してみると「陶詩の源は応璩に出ず——という説にたいして、一脈の淵源関係をこの時代の歴史からもたどることができよう。

また梁・昭明太子からは「白璧の微瑕」、まるで美人の顔にあるそばかすのごとしと評された彼の「閒情賦」についても、その前をゆく応瑒の「正情賦」（芸文類聚十八）の逸句も拾遺される、これにもまた彼の詞賦が汝南応氏のあいだに絶えて淵源関係を引かないとは限らない。もつともこの種の作品は、作者なかまに読んでもらうために書かれたもので、百姓平民によびかけた文学ではない。

註　「応瑒集」の原訂本があつたかどうかは詳らかでない。『詩品』には、応瑒が建安詞壇の巨匠でありながら、その詩句にふれた評論は一句も見出だされない。にもかかわらず彼の迭文として傳えられた賦、詩および書翰や雜文の数が遺集を傳えた彼の弟の瑒に見くらべて少くはない。それはどうした現由によるものだろうか。これらの諸篇は汝南応氏の作者の手で書かれたことにはちがい

ないが、かならずしも応璩の原作でなかつたのではなかろうか。それは応璩の作として拾遺される佚篇のうちにも彼の遺作と読みがたいものがあるように、このあいだの理由については、次ぎに考えてみたい。

応璩百一詩の原型　諷刺詩諧謔詩の秀作として知られた応璩の「百一詩」は、もと百一首であつたが、今存する完篇は数首にすぎない。しかも作者としての彼にふさわしい遺作は、『文選』に載せられた「下流は居るべからず」の一首ばかりであろう。梁・昭明太子が『文選』を編したときでも、この一首のみが彼の原作と見たかも知れない。

下流不可処、君子慎厥初。名高不宿者、易用受侵誣。前者墮官去、有人適我閭。問我『何功徳—三入承明廬？所占於此土—是謂仁智居？文章不経国、筐笈無尺書、用等称才学—往往見歎譽？』避席跪自陳、「賤子実空虚。」宋人過周。客慚愧靡所如！

註　その李注に「文章録曰璩字休璉、博学好属文。明帝時、歴官散騎侍郎、曹爽多遵法度、璩為詩以諷焉。典著作、卒。」また李注に「文章志曰、璩汝南人也。詩序曰、「下流、応侯自誨也。」とある、「詩序」とは「百一詩」の各首につけた序で、「下流」はその原題、「応侯自誨也」一句は、自ら誨しめる作であるの意。彼の遺作を「百一詩」と云う。一本にまとめたのも、「詩序」及び注をつけたものが、世に行われていたからである。また李注に「璩初為侍郎、又為常侍、又為侍中、故云三入。」とあるのは、その「三入」を注した語句を引用したものと見られる。

『文選』に載せられた「百一詩」一首は、また『応集』から引いたのでなくて、「彼の子応貞が書いた『百一詩注』によつたもので、それには各首に、原題の下にその序と、その序下や句間に注文が加えられてあつた。『百一詩注』の「下流」の題に、「自ら誨うなり」とあるが、その実作者応璩が官をやめて郷里にかえつたとき、応家の子弟、童蒙たちに課した教本に用い、彼らにたいする教誨の意味をもふくめられている、と考えられる。その句意を評釈してみると、

「君子は下流には居らない」（論語）とは孔子の言葉、暴主の万悪はその下流にあるものが一人で皆負わされるから

だ。「その初めを慎め」（書經）と古の聖人は叫ばれている。名位高く顕わるまでにはそのかげには、きつと下位を守り通してきた忍苦の時代があつたわけだ、かろがろしく高位につけば誠侮をうけるものだ。前年のこと、私は官をやめて家にもどつてきた、すると一人の大官が私の郷里までやつて来てくれたが、田舎住居とて、遠来の貴客を持てなそうにもすべがない、取つておきの醴酒を傾け、ありあわせの乾魚を焼く。大官は酔うままにいろいろと話しかける。私に問う、『君は、どうした功徳があつて、侍郎、常侍、侍中と、三たび承明盧に宮仕できたのか。田舎に帰つてここは仁人智者が住む世界とでも思召されるか』。貴客なお膝をすすめて、『文章は経国の大業なり』と、文帝は宣りたもうたが、私が見たところでは、君の筐をあけて見たとて、みかどに捧ぐべき一尺の策書も無さそうだ。

それなのに、どうして君の才学が帝から称えられて、

とんとん拍子で官に陞つて、名誉をあげたぞ、

と問いつめられる。私はただ恐入るばかり、席を避けながら、

『不肖私は、大官さま仰つしやる通り、まこと何もございませぬ』と叩頭お詫び申上げる。——

これはまつたく、宋国の馬鹿者が室から賓客に訪ねられて、その珍宝（その實瓦石）を誇つた場面にそつくりだ。

何と恥かしいことよ。

作者が官を退いて引きこもつた郷里の田舎に、はるばるやつてきた貴客に擬せられた人物が曹爽であることは云うまでもない。仮装仮作ではあろうが、目のあたり見るがごとくその風景を写しだしている。それだけに作者の眼もひらめいて最後の諷刺の一針は鋭い。爽の専横な政治は、古の法度に違うものが多かつたことが、彼をして官を去つて田舎に帰らしめたがごとくよそわしめて、起筆まで「君子下流には処るべからず」の古訓を持出して抗議し、帰つてからのしごとで、汝南応氏の子弟たちに教課した題材を歌つたかのごとく見せかけている。そこに作者の子応貞をして解注せしめ、その詩型をくずさしめた素因があると私は考えている。彼淵明にもたしかに、子弟のために教課した場があり、それを詠んだ句

作もその教課に用いた題材を詩句にし、またそれをまとめて教本にしたものもあつたとも考えられる。

また、筆を古経典の格言におとして荘重に詠みだす手法は、陶淵明の詩句に、とくにあざやかに用られているばかりか、「名の高きは宿者ならざらんや、……」の二句にうたわれた薤夫故事は、彼の詩句にもくり返えされている。仮設された来客を登場させて、ともに酌み、酔わない客の発問を切りだして、酔醒問答、同床異夢の詞境を展べる彼の常套手法も、このあたりに淵源がもとめられてよかろう。ここでは高慢ちきで礼を知らない貴客に、云うだけのことを云わしめて、「宋人周客に遇う」故事をつぶやきながら結んだ二句で、天外の落筆、対者の虚を衝くのおもむきがある。席を避け叩頭するものの勝である。諷刺文学の句法もここに至つては上乗極致というほかない。この見ごとな詠いぶりには、いかに権勢を誇る曹爽にしたところで怒つてはおれない。「百を諷して一を勧める」諷刺文字が実を結んだかたちが見られる。

傲慢な暴君乱臣も諷刺の歌謡詩句の前には、微笑みてうなずかしめ、その心を動かしめた例は、中国の歴史では古くからしばしばある。曹爽と作者応璩との相遇もけだし常識であつて奇蹟というほどのことでない。彼の「百一詩」が時の当事者たちに贈られたとき、みな愕然色を失い、曹爽の忌諱を恐れて焼棄てようとまで驚きうろたえたものがあつた。ひとり何晏だけが平然の表情ですましていた、と伝えられている。

古詩の諷刺を活かす　『文選』の『百一詩』一首に附けた李注には、晋以後の作者や史家の著述を引いて、応璩の句集『百一詩』に関する記載がある、いま左にその三条をかかげる。

彼の五言詩は、すべて百数十篇ある。時代の政治道徳問題を諷詠して正しい方向に仕むけようとしたものである。だからそれには、古詩人の伝統ゆかしい旨趣がうち出だされている。

李充翰林論曰。応休璉五言詩、百数十篇。以風規治道、蓋有詩人之旨焉。

と、晋・李充の『翰林論』を引いて註されている。その五言詩百数十首のうちに『百一詩』の百一首があることは云うま

でもない。

作者応璩に五言詩百三十篇がある。時事問題をとりあげて詠まれたもので、政治道徳を発揚するに役立ち、世間では多く読み伝えられている。

孫盛晋陽秋曰、応璩作五言詩百三十篇、言時事、頗有補益、世多伝之。

と、孫盛の『晋陽秋』を引いて注さる。『翰林論』では五言詩百数十篇といつているが、ここで百三十篇というのはその実数に近かろう。世間でもよく行われた読物になつていたこと、ただ李・孫二人が読んだ本は書題は『百一詩』ではないがその百一首のほかに彼の詩作三十首ほどが、彼の集にまとめられていたことが知られる。

註　李注では「翰林論」「晉陽秋」を引いたあとに「拠此二文、不得以一百一篇而称百一也。」とあるが、これは彼の集のほかに「百一詩」が世に行われていた事情に暗いところからきた誤解である。

汝南の応璩は『百一首の詩』を作つて、時の政治にたいする切実な、きびしい批判を詠み、相手をえらばずあまねく当路の者に贈られた。それを承けて読んだものはみな、怪しみかつ驚きをなした。あるひとは、これは忌諱を避けるために焼棄てるがよい、でなくば危ぶない、とまで云つたが、何晏だけはひとりそれを怪しみもしなかつた、ということである。

張方賢、楚国先賢伝曰々『汝南応休璉、作百一篇詩、譏切時業、徧以示在事者。咸皆怪愕、或以為応焚棄之、何晏独無怪也。』然方賢之意、以有百一篇、故曰百一。

と、張方賢の『楚国先賢伝』を引いて『文選』に注されている。

註　その注者は、張方賢は『彼の詩作が百一首あつたので「百一」と題された』と見ている、と考えているが、張氏のみた本には「百一詩」と題されていたとは、この句意から読めない。「百一篇詩」の篇字が誤入でないかぎり。

この記載で知られることは、彼が百一首の詩作を当路者たちに贈つたときは、まだ「百一詩」と命題されていない、

「百一詩」の命題は読者が呼んだ俗名であるらしい、ということである。このことは次ぎの「今書の七志」を引いた注文で、判然とする。「今書の七志」は宋・王倹が奉勅して撰した『七志』で、それは『宋書』におさめらるべく予定されて「今書」とよばれたのであろう。

この記載によると、はじめ「百一詩」百一首の作者は、『新詩』の表題で当路の者たちに贈つたのであるが、それが読者からいつとなく「百一詩」とよばるるに至つたことが判る。別にほかの作品約三十首を加えた百数十首の『応璩集』が「百一詩」とともに世間に読まれたので、この二部の集本のあいだに混乱をきたした事情が考えられる。

もと『新詩』の句集を百一首でまとめた作者の創意が、「百を諷して一を紡める。」という、古詩がもとからもつ諷刺諧謔の歌心にあることは、とりたてて述べるまでもない。がそれに『新詩』と題してもち出したところに、書き改められた第二古詩としての新鮮味、時代の新しい詩句のありかたを意味するものであるが、そこには当路の者や作者たちに初見せする作者の意図をもうたつている。ところが、『百一詩』が単行本でも世間に行われてくると、当時の風流清談の好事家たちの談義口上で「百慮に一失あり」型の縁起話しまでそれに附会するに至つた。

今「宋書」の『七志』によると、応璩は自家の詩作を一本にまとめて、これを『新詩』と云つていた。百一首の詩から成るので、あるひとは『百一詩』とよび名した。がその命題には、作者の名字とか句境から取つたものでない。いま「百一詩序」によると、『彼はあるとき権勢時めく曹爽にむかつて、「曹公よ、あなたは今では周・成王に摂政した周公のごとき高貴な地位におられることで、世間一般からも仰がれている方であるが、そうした賢聖にもどうして百慮に一失なきを予知できようぞ』と云つたという。―「百一」のよび名はけだしここに生起したものであろう』と

今書七志曰、応璩集謂之新詩。以百言為一篇、或謂之百一詩、然以字名詩義無所取。璩百一詩序云『時謂曹爽曰、公聞周公魏魏之称、安知百慮有一失乎？』百一之名、蓋興乎此也』。

ここで私は読者とともに、古い歌謡からふみだしたいわゆる古詩が、この時代に応璩の「新詩」を推しだしたその歌心、

文学心、は「諷刺」であることに、思いをいたしておきたい。詩の経典『詩経』古詩三百篇をよむものも、そこにうたわれた「諷刺」の心をくまないでは解しえない。その諷刺の心は古詩の生命であり、背骨である。諷刺味がこまやかに詠まれるところに、その詩歌は活きる。新しい詩歌を推しだす力はそこにもつている。このことは、中国の詩歌の文学がもつ本質的な、もつとも大事な要素である。古歌謡がまだ歌と諺とに分離されない原始から、諷刺を手離したことはない。

古歌謡は多くの場合、作者未詳のかたちでうたわる、その諷刺は之を聞くものに益あつて、これを詠んだ作者にも咎めをうけない。作者を名乗る文学の時代になつても、この古くから伝統的歌心を手離さないかぎり、いかに権勢横柄の人のまえにも、その詩句にふくめた諷刺で、物いうことができた。その無道ぶりに一針をむくいることができた、これは大きな力である。応璩の「百一詩」の百一首は古詩がもつ諷刺の歌心を活かした第二古詩『新詩』である。曹爽のごとき悪漢も、彼の「百一詩」の前には、しばらくは、ま人間となりえたのである。だから彼の「百一詩」は曹爽をして怒らしめなかつた。危害を彼に加えなかつた。

註 I、前掲の「七志」の文は、『応璩集』の解説ではない。「応璩集」の集字は下句につけてよむべきである。宋・鄭樵の『通志』にも集字を上につけて彼の集名であるごとく誤つた読みかたがされている。また『七志』に引かれている「百一詩序」によると作者が曹爽と対談したとき発した作者の言葉にもとずく命題と解されている。この「百一詩序」は作者の子応貞が注した「一百一詩」の宋まで持ち越した通行本に序したもので、応貞の序であるならば、「百一詩」ができた縁起など判つておらなかつたはずはない。また応貞によつて「百一詩注」が書かれたことは古書の記録にも載つているが、それが「百一詩」と命題されていたことも疑わしい。おそらく後人が応貞の注に仮名して、「百一詩」の書名で読者によびかけたものであろう。

註 II、「隋志」には「魏衛尉卿応璩集十巻」とあり、その注に「又有古遊仙詩一巻、応貞注応璩百一詩八巻、百一詩二巻、晉蜀郡太守李彪撰、亡。」と梁にあつた四本が隋には佚亡したと註されている。「隋志」の『応璩集』十巻に何が輯められたかは詳らかでない。梁では子の応貞が注した「百一詩」八巻本のほかに、晉の李彪が撰した「百一詩」の二巻があつたと記されているが、李彪

の撰本は応璩の原作であるか、それに擬作したものか、見わけがつかない。新旧「唐志」には「百一詩八卷応璩撰、百一詩二卷李夔撰」と記されている。新旧「唐志」にはまた「応瑗集十卷」と記されている。これは「隋志」にも載つていないし、晉宋の史傳にも応瑗という人は考えられない。瑗は璩の誤写であろう。したがつて、後の応璩の詩文を引く者が応璩と応瑗とを別な人物にしている は誤。応貞は父が未定稿のままに遺した「石榴賦」を完成したことは、『北堂書鈔』九十八に「応貞安石榴賦云、応璩感於事而作、毎不留意。時趙参軍為通事郎対、貞不停筆而成也。」（安字は序の誤か）とあるによつて知らる。

前にも述べたごとく、その時代の統治者、統治階級の人物も、その時代の文学の協力者であり、そして作者の『朋友』であつたからには、諷刺の針をふくんだ作者の詩句をうけ容るだけの雅量だけは、彼らの教養として古歌謡古詩にたいする伝統的常識としてもつていた。だから応璩とかぎらず、魏晉の作者たちの詩歌文学には、その時代を反映して、失望、哀憐、悲惨、荒寥、賦役苦、超然、曠達、高邁、諦観、と云つた複雑な感情要素を織りこまれているが、諷刺という歌心が貫いているところに新詩の創造が見られたのであり、新詩運動もおし進められたのである。この時代の詩歌は、その詩型からいえば五言詩という太い縞模様が染めだされているが、その文学性からいえば諷刺がふとい絲目になつている。応璩が作つた「百一詩」の詠懐には、この文学史的な趨勢を示すものがある。それはその時代の作者からもみとめられていた。だから『新詩』と題して「百一詩」が当路者たちに贈られたとき、作者と曹爽の対決などは、その詩句の読者たちによつて吹聴された話題になつたのではなかろうか。

読者は私が前に述べたことにこだわらないで、応璩から後に出た作者たちの詠句をよんで、彼が活かした諷刺味なり、その手法がどの作者にもつともよく承襲されているかを見るがよい。きつと、そうした歌心が時代をへるにつれて稀薄になつていつた歴史を知ることができよう。そしてそれがもつとも彼淵明の五言詩において、その手法まで復活されていることを知るであろう。読者はまた、前に引いた晉の李充の『翰林論』に、応璩の五言詩に「蓋し詩人の旨あり」を評したことばは、それと鍾嶸が『詩品』に彼淵明の詩句にたいして、「篤意真古」古の作者を思わしめる詠懐を賛したことばを対

照してみるならば、その「詩人の旨」とは、古詩人の諷刺の心、力、その歌心文学心であることを知るであろう。

応璩書林と書記文学　応陶両作者の源流関係を見出した鍾嶸は、その『詩品』で、応璩を彼淵明と同列の中品作者におき、その詠句にたいして、次ぎの論評をあたえている。

応璩の五言詩には、魏文帝曹丕の側近にあつただけに、その詠いぶりが祖述承襲されている。よく古詩にうたわれた語句を詠みこなしている。事実をありのままに語ることも行きとどいている。風雅な意境も深めかつ篤くされている。古の詩人がその作に示したはげしい、きびしい、諷刺の歌心がしかと把捉されている。その済々と整つた所作になると、今日の詠みぶりに見られる「華靡」さえもあつて、諷誦吟味に値する。

魏侍中応璩、――祖魏文、善為古語、指事殷勤、雅意深篤、得詩人激刺之旨。至於済済、今日所華靡、可諷味焉。

梁鍾嶸詩品巻二

註　『文心雕龍』「明詩篇」に「若乃応璩百一、独立不懼、辞譎義貧、亦魏之遺直也。」、また同書「才略篇」に「休璉風情、則百一標其志。」と二ど彼の「百一詩」をとりあげているが、ただ字句をあてはめたもので、『詩人激刺の旨を得たり』のような鋭く彼の句境を衝いたことばとはよめない。

と、鍾嶸が述べているところに、彼淵明との淵源関係を古詩の諷刺からも見きわめていることが知られる。胡適教授がその『白話文学史』で、諷諧詩という点で、応璩から彼淵明に流された文学史的趨勢以後、作者たちはみなこの歌心を見失つてきたのに、彼淵明にいたつてふたたび回復され、その手法をうけて新詩体が創られたとしたら、そこに淵源関係をみとめざるを得ないではないか。

ここで私はこの両作者の詩賦文学から、無韻体の散文で書いた文学について、そのあらましをみておこう。

この時代の文学では、有韻体で書かれた「文」すなわち詩賦では五言詩が主流をなしていたように、無韻体の「筆で著

しい風潮をなしたものは『書記文学』である。作者は多くいわゆる駢儷の才をきそつていた。書記とは、廣い意味で今の公文書の製作である。応璩が書記文学に長じていたことは、前掲の『文章叙録』に「よく書記を為る」とあることでも知られる。その遺作があとに『応璩書林』八巻にまとめられて、書記をつくる指南書の役目、平たくいえば書翰や公用文章を書く教本として、ひろく坊間に読まれ、あるいは家塾などで用いられたと思われる。

註　『魏志』の高堂隆傳に「初任城桟潛。」その裴注には「潛字彦呈、見応璩書林。」と読まれる。梁には夏赤松を編者とする『応璩書林』八巻本がある。夏赤松、その人未詳。「隋志」には、「書林十巻」とあり、その下に「応璩書林八巻」と記されている。ともにその編者を考えることはできない。旧「唐志」に「書林六巻、夏赤松撰。」とあり、新「唐志」に「夏赤松撰書林六巻」、とある。これらの記録によると、ただの『書林』の十巻本があり、また『応璩書林』にも無名氏の八巻本があり、夏赤松の八巻六巻両本が得られていたことがわかる。

『文心雕龍』の「書記篇」に「休璉好事、留意詞翰。」とある。これも前掲の諸史傳の字句を模して、彼が書記文学や五言詩に長じたことを語つたにすぎない。『文選』の「亡命」註に「瑗与桓玄則書曰、敢不策励、敬尋後塵。」とあるが、瑗は璩の誤写であろう。書記文学に長ずることはこの時代の作者には皆見られるところで、彼淵明においてもその例外にたつものでない。と云つて私はあえてこれを応陶両作者の淵源関係に附会しようとするものではない。ただその書きぶりについて附言しておきたい。彼の集にも載せられている「子の儼らに与えた疏」の一篇も、書記の秀作と見てよいが、彼には時代の統治者、作者たちにあたえた格調ばつた書記駢儷をきそうた名作は遺されていない。したがつて「子の儼らにあたえた疏」のごとき、彼が死期迫るを覚えたとき子儼らにたいする遺誡として書かれたもので、いわば彼の自叙伝とよまるべきたちのものである。彼の歴史や、家庭事情、思想生活に関心をもつ読者には大事な記録である。

註　昭明太子の「陶淵明傳」によまれる、彭沢から一人の僕をつかわしたときその子にあたえた一書のごとき――『これまた人の子なり、よくこれを遇すべし。』わすか六句の短篇ではあるが、ほかの作者に見られる美辞麗句を列ねた長篇にもまして、読者をし

て彼のまじめな姿貌を想見せしめる。

応璩の書記では牋・書の佚文三十数篇が拾遺される。「曹昭伯（爽）にあたえた書」（太平御覧九百四十七）も読まれる。彼が帰国したときその従弟にあたえた書（文選・芸文類聚二十八）には、淵明の田舎詩句や「帰去来辞」に示された詠懐をよむことができよう。

……酌彼春酒、接武茅茨、涼過大夏、膚寸看修、味蹠、方丈、逍遙塘陂之上、吟咏苑柳之下、結春芳以崇佩、折若華以翳日、弋高雲之鳥、餌出深淵之魚、蒲且讃善、便嬛称妙、何其楽哉

——與從弟苗君胄書

汝南詞壇の協者程曉　東郡の東阿、今の山東省の人ではあるが、汝南詞壇に貢獻した作者に汝南太守程曉がある、彼は嘉平年間（二四九—二五三）に、黄門侍郎から汝南太守にうつつて年四十ばかりで卒した。応璩とはやや弱輩であるが、書記翩翩の才筆をふるい、詩人太守として応氏が主持する汝南詞壇に協力したことは想像に難くない。『古文苑』に載せられている「熱客を嘲る」一首を次ぎに引く。応璩が「百一詩」とよみあわせて、すこぶる両作者の詠みぶりに親近を感じさせる。

平生三伏時、道里無行車。閉門避暑臥、出入不相過。只今褰裙子、触熱到人家。主人聞客来、嘶蹙奈此何！
謂当起行去、安宗正吞差。所説無一急、喈喈吟何多。（披倦向之苦、甫間居極那？）揺扇髀中疾、流汗正滂沱。
莫謂為小事、亦是一大瑕。専戒諸高明、熱行宜見呵。

——古文苑巻八、嘲熱客

註　この一首は太平御覧巻三十一・三十四にも見える。「喈〃」句下に「疲倦向之苦、甫間居極那」の二句がある。「一大瑕」を「人一瑕」に作る。このほかになお二首の「熱客を嘲る」を拾うことができるが、同じ作者と思えないほど平俗である。

三伏時節、まつたくやり切れない暑さだ、そとの街路でも、このほてりに車一つ通つておらない。誰も皆門をとじて避暑、寝ころんでいる、近くの隣りえも、出かけようとはしない。

今しがた、一人の馬鹿野郎が、暑熱にあえぎながら、うちにやつてきた、主人は、好ましくない訪問客があるをきき、困つたナ、奈何しようと顔をしかめるばかり。ちょいと遇つてやつて追いかえそう、と、うちに入れた、客は坐りこんで、咨嗟ごとをぶちまきはじめた。何一つ要談をもつてきたのではない、無駄話をつづける、判りにくい自作の詩句までもちだして。堪つたものでない、私は疲れはてたので、「結局何のご要事で」と一言切りだしてみたが、客はなおも扇をあうち、片足あげて、ぽたりぽたりと汗を流しながら、私に向い、『あなたはこれは小事と仰つしやるが、これが白璧（詠作）がもつ瑕なのだ』、と攻めつけて去つた。

『このありがたい忠言は、高明なる諸君子にもお伝えするであろう。が、この暑中訪問だけはやめてほしい、ほかの方だと一喝喰わされますぞ』。とでも云つてやろか、私には答うる言葉がない。

評釈してゆくうちに、この一首に嘲られている熱客とは、守旧派の作者に擬された人物と思われる。詩人太守程曉が汝南に展べられた新詩運動のため、応璩と肩をならべてその先頭にたつた意気が、このま夏の訪問者を嘲る舌鋒からもほとばしつている。

鍾嶸が『詩品』で応璩を評したことばの末段は『済々たるものに至つては、今日も華靡とするところ、諷詠すべし』と結ばれている。評者が見た彼の遺集には整然とした体型をそなえたものと、その体型をくずしたものとがまざつていた。『文選』に取入れ、「百一詩」の一首はその「済々」であつて「華靡」なるものであるが、ほかに拾遺される数首になると、儒教の経典主義を強調した庭訓をうたい、同じ作者の手に成つたとは思えないほど、平板無味である。それはまたどうした理由でこの純雑を取りまぜた作品が今日でも拾遺されるのか。これが程曉の遺作においても見られ、また彼淵明の集にもあるとしたら、それは応氏とそれをめぐる汝南詞壇から彼淵明にむかつて展べられた文学性という問題でその理由が考えられねばならない。今の輯佚集でみても、「百一詩」の佚篇八篇が拾われている。その「三叟」はわりに整つた作であるが、「雑詩」三首などとともに「百一詩」から除かれるたちの作品ではない。その多くは平俗で、けつして『新詩』

とよばるるに当らない。その一首の句例をあげるなら、

古有行道人、　陌上見三叟。　年各百余歳、相与鋤禾莠。住車問三叟、何以得此寿？上叟前致辞、『内中嫗貌醜。』中叟前致辞、『量腹節所受。』下叟前致辞、『夜臥不覆首。』要哉三叟言、所以能長久。　――百三名家集三叟

むかし、道を天下に行わうと旅したひと、路傍の田圃で、百歳ばかりの三人の叟が耕やしているを見うけたぞ。旅びと軍をとどめて、『おたずね致しますが、あなたがた三人は、どうして、そろつて、そうもご寿命を長生されるのか』一人の叟すすみ出て、『内の女房が醜くい顔だからですよ。』また一人の叟『腹八分と云うところで節めているからよ。』今一人の叟『夜寝るに布団を頭までかぶらないことです。』三人の云うこと、何と理みちのある言葉じや、長寿するのもそのはずだ。

註　今二つ句例を左にかかぐ。

秋日苦作短、遙夜邈綿綿。貧士感此時、慷慨不能眠。　――同上・百一詩

子弟可不慎、慎在選師友。師友必長德、中才可進誘。　――同上・百一詩

素樸平俗な帰田の詠懐　私の「陶詩源」追求がここまで奥の細道をたどつてくると、向うに恍として光るものがある、彼淵明たちの言葉でいうなら、『忽ち見る』ところの『豁然闊朗』の世界が近きにあると雀躍を覚えるものがある。

彼淵明の「帰去来辞」は、一賦飄然、彼が彭沢令をやめて帰つてきた途すがら詠まれた即興詩ではなくて、帰田後十年の歳月をかけた彼の文学の決定版であることは、前篇（養陶篇1）のうちで詳らかにしたところである。その句境にいたるまでの題材となるべきものは、四言詩の「帰鳥」はじめ、彼の詩文集のうちに、満篇どの詩句どの文詞にも布置されているではないか。それにはその帰田思想と、それを表現する技術の若さ、円熟さが錯綜しているとしても。そして応璩、その兄の瑒、汝南詞壇に協力した程晩、応貞以後その詞壇を整えられない以前の状態において、あらゆるその題材につい

て、その媒材についても、実的価値をもつ素材がとりあげられている、帰田の趣味は応瑒の「帰雁」によびかけた華林園の宴集で作られた詩句に、帰田の生活は応瑒がその従弟にあたえた書翰のうちにも粗末ながらも語られている。それと同じようなことは彼淵明の「従弟敬遠を祭る文」に述べられている「子儼らにあたえた疏」にも、また「自ら祭る文」にも。――『論語』によまれる長沮桀溺の隠逸帰耕の生活とその思想は、彼淵明の詩文にはいくどもくりかえし詠まれているところである。彼を「古今隠逸詩人の正宗」と賛詞を呈した鍾嶸も、おそらくこのあたりに彼の人間像を浮彫させてながめたのであろう。それが応瑒の「百一詩」の一首と見られる「三叟」にも、その文学として手法は素樸平俗であつたとしても、民生の開発、童蒙の教養、農民の啓蒙という見どころから、いと親切に、ゆきとどいて、をも強い説得力を以て、呼びかけられている。こうした事象は、時代の文学風潮からみれば、応氏作者をめぐる汝南詞壇と、それから時と地の隔差つ個の作者彼淵明においてのみ、とくに著しく見出だされる文学性であるだけに、その特異な二つの文学性をむすぶ淵源、師承、交渉の関係の歴史を呈定することはできないであろう。

読者もし、彼の「飲酒」の末首に聖人孔子を「吾の中の叟」とぶつきらぼうによびかけている句に注目されたら、これが応瑒の「三叟」の影子からきたよびかけであることをが推測されるだろう。前注に写しだした「百一詩」の一首――

秋はその日脚の短かくて暮れやすい、それが厭だよ。長い長い夜なかを、何彼と思いわずらうことが多くて。「貧士」である私は、この時代の相に感ずる。そして、慷慨悲歌、私は眠ることができないのだ。

と、うたわれている風懐は彼淵明の「飲酒」「擬古」「雑詩」や「貧士を詠みて」渚作にも同じ題材で、しかも同じ造句の手法で写されている。彼の文学の上はかりでなく、彼の読書学問においても、汝南の読書世系応氏の学術が彼に承襲され、それが彼の著述吟詠の字句のあいだに、こまやかな色どりと絲目を示している。ここまでつきつめてみると、鍾嶸の「彼の詩源は応瑒に出ず」――という創説は、きつと原拠するところがあつてのことで、もはや疑点をさしはさむ余地をのこさない。さらに一歩を進めて、応陶の時地の隔差の歴史を埋めるために、応氏の諸作者と彼とのあいだに、汝南応氏

と潯陽陶氏の両大門閥のあいだに、血縁、あるいは政治文化史的交渉、文獻書巻の授受の関係が考えられなくてはならない。

註 彼淵明に武昌程氏の妻となつた一人の妹がある。左思に妹左芬あるを思わしめる女性であつたが早世したことは彼の「程氏妹を祭る文」、「帰去来辞の序」にも知られよう。彼の母は落帽風流で知られた武昌孟嘉の娘である。彼の妹が嫁いだ武昌の程氏、陶潛『搜神後記』（巻三）にも出ている程咸は、字は延休、武帝の時歴官して侍中に至つた、晉代詩人を出した璟郡の程氏、そして前に述べた「熟客を嘲る」の作者程晓の東郡程氏、この三程氏と潯陽の陶氏とが何かの縁りと交渉で淵源づけられる歴史がないとはいえない。

応・陶両世家のあいだが血縁関係で結ばれたことは今の史料では考えられないが、潯陽に陶氏の門閥をひらいた陶侃と江州刺史応詹とは血縁を超えた親近な仲であつたことは次に述べる。

江州刺史応詹と潯陽陶氏 潯陽陶氏の開始は彼の曾祖陶侃になつてはじめてその根もとが固められ、侃の卒後は悲惨な崩壊をたどつたが、「彼の歴史」は曾祖の侃を発足点として語らねばならない。それ以前にさかのぼつて考えるだけの史料は伝えられていない。したがつて汝南応璩と彼の遠祖陶氏との関係を知る記録はもとめられない。ここでは璩の孫応詹と陶侃との交渉歴史を考える前に、詹の叔父応貞のことについて今少しく補つておきたい。

応貞がその父祖の文章事業を継承して、その弟秀の子詹とともに、晉代作者として名声をあげ、そして汝南応氏の歴世作者がきずいた書巻の遺産を伝承したことはたしかである。その貞は『晉書』の文苑伝に、詹もまた同書の列伝に伝されている。そして貞が「百一詩」を注したほかに『応貞集』五巻があり、泰始四年（268）の二月のこと、晉武帝が華林園に宴射したとき賦した四言詩は、諸作者をぬいた傑作と称賛を博したことがその詩句の全篇とともにその伝中に光つている。応詹また作者としても一家をなし、『応詹集』五巻がある。

今『文選』に載せられている応貞の「晋武帝の華林園集の詩」は四言八句の九章から成る長篇であるが、私たちはそれを読んでみて、彼淵明の詩集の首巻にまとめられている四言詩の一巻が伝える句調風韻とすこぶる交響するものを感ずる。また類型的な語法まで見出だされる。そこに何かのゆかりがあろうと考えられるが、それは葉をふるつて根を尋ね淵（なみ）をみて源を索めるそしりをまぬがれぬから、ここではよそう。

註　「魏志」の王粲傳の裴注に「文章敍録曰、応貞晉室踐祚、遷太子中庶子散騎常侍。又以儒学、与太尉荀顗、撰定新礼、事未施行、泰始五年卒。」とある。また『文選』巻二十「晉武帝華林園集詩」の李注に「洛陽図経曰、華林園、在城内東林北隅、魏明帝起、名芳林園、斉王芳改為華林。干宝晉紀曰、泰始四年二月、上幸芳林園、与群臣宴、賦詩観志。孫盛晉陽秋曰、散騎常侍応貞、詩最美。文章志曰、応貞字吉甫、少以才聞、能談論、晉武帝為撫軍将軍、以貞参軍。晉室踐祚、遷太子中庶子散騎常侍、卒。『文心雕龍』「序志篇」に、又君山・公幹之徒、吉甫・士龍之輩、汎論文意、往往間出、並未能振葉以尋根、観瀾而索源、不述先哲之話、無益後生之慮。」とあるが、応貞に文学評論の著述があることは、どこに拠つて云うか、詳らかでない。

『晋書』の応詹伝には、詹が陶侃と斷金の交があつた始末が明らかにされている。そしてこの二人はともに杜弢の反乱を長沙に破つてから、相別れて晋王朝のために、馳駆奔走、そのつくした功業は大きい。そして東晋の成帝咸和六年（331）に詹は江州刺史で、その任地に病卒した。それまでにこの二人が相逢う機会がなかつたとはいえない。弢を破つたとき、詹は長沙に存した遺産珍宝をその所有にせず、ただ書巻のみをことごとく自分の手に收めたことが記されている。また詹が病危いとき、「陶淵に与えた書」で、二人の交友関係を回顧して、自分は興国の事業半ばにして病に斃れるであろうが、年徳なお盛んな君には後事のすべてを遺嘱しておきたい。』と、遺嘱の書を留めている。その時陶侃は太尉で北地の軍事に奔命していたので、その書をうけてかけつけて来たかどうかは判明しない。詹の卒後、いく年かして侃もまた卒した。

応詹が陶侃とともに長沙に杜弢を討伐したとき收めた書巻というは、古い伝統をもつ長沙王に世襲されていたものであろう。その長沙に侃は長沙郡公となつた。そして彼ののち長沙郡公を世襲して、彼淵明をおとずれたことのある陶それが

しに及ぶ。その陶それがしに対しては『長沙公に贈る』が書かれ、そこには、曾祖陶侃の功業が賛美されている。してみると、潯陽陶氏を開いた陶侃は、晩年にはその宗族を長沙にうつしており彼淵明の世系はその正宗を引かない傍系であることが知られる。が、長沙郡公に封ぜられた侃は、かつて詹が長沙で收めた書巻を、両人の交友関係から云うても、また長沙郡公の署での政教上の必要からも、きつと継承したであろうと、私は見るのである。

かく晋王朝の復興に尽した二大人物はかたく結ばれているが、やや先輩の応璩は陶侃に先だつて、江州刺史の任地潯陽に卒世した。その遺嘱を吟味すると、二人の仲は尋常の交友関係ではないことが判る。国家王朝の大事を後嘱することのかげには、汝南の読書世家応氏の将来についても、きつと遺託されたものがあつたにちがいない。もし汝南の応氏から潯陽の陶氏にむかつての読書種子の賦与、いくらかの書巻伝承があつたとしたら、この二人のあいだにおいて、この前の長沙か後の遺嘱する時か、どちらかの時期にあつたとしか考えられない。応劭の叔父応劭は『風俗通』『漢官儀』などの著者で知られている。汝陽応氏で伝世の珍宝として承襲された書巻が、彼淵明の文学をあらしめた素材でもあつたようである。というのは、貧しかつた彼にも読むべき書巻だけはゆたかにしていたことは彼の詩句によまれている。彼は諸経典のうちでも『詩経』『論語』『孝経』また史伝のうちでも『史記』『漢書』に精通していたことも、彼の詩文のうちにそれらの経史書巻から、随意にその用語故事を使つていることでも知れる。そればかりでなく、その経史からきた教養をその家庭社会の生活に活かしている点は、応璩から応詹にいたる、陶侃から彼淵明にいたる両世家の系列において、陶氏は応氏からの投影があるようである。このあいだの歴史については、前篇で述べられている。（『陶篇1「江州刺史応詹の遺嘱」の条）

庶民文学への動向　鍾嶸の「陶詩の源は応璩に出ず」――の創説を支持する私の論考は、ここで筆をとどめておこう。これは彼淵明の文学からいえばその源流関係を歴史で解決する問題であるが、魏晋文学史の趨勢からいえば、新しい型の

文学を創りだした前進である。それはまた統治者支配層をめぐる作者たちが排倪対偶化をたどつて格調ばる判りにくい文学風潮にたいする抵抗でもある。文学に通暁してそれを馳騁する技術に長じた詩歌からぬけだし、歌謡古詩の原始文学心を活かして百姓百工たちの職場に基調する庶民文学へとむかう動向を示している。この足どりがどうたどられて来たかについて、少しく書き足しておきたい。

前にも述べたように、応璩の「百一詩」にも、程曉の詩句にも、その作者の風格を写した格調が同じ作者の創造と手法を経たものとは思えぬほど、雅趣と俗味の交響を示している。同じ作者の遺篇のうちに鍾嶸が指摘したように、「洸々整つて華靡」なものとそうでないものが見出だされる。これが「雅と俗、純と雑の混乱」であるとしたら、これをもたらした事由はどこにあるのだろうか。

建安の作者たちも、またその擁護者であつた曹父子たちも、おしなべて遊侠はだの人物であつた。「文章は経国の大業」と身みたつたのであるが、遊侠そのままの素はだでは、いかに古詩がもつた諷刺諧謔を活かしたとて、新しくかつ高い詩型が創られないし、文学が書けるものでない。題材を作者の学問や思想にもとめてそれを深めることを必要とする。なかでも唱われる文学では、古楽曲の遺響を見だして、それに譜することによつて、新しい歌詞がもとめられている。そこに美辞麗句化する兆が見られるとともに、遊侠を気節とか風力骨気とかいうもので改め、素撲な諷刺諧謔を稀薄ならしめることによつて権勢の忌諱を廻避しようとする。そして古詩がもつ歌心を百姓百工の職場で活かそうとする作者は、遊侠のお点前の強きをくじいて弱を助ける、民生の開発、文化の啓蒙と云う高い見どころから、統治者たちの政治にたいする民衆苦、賦役からきた悲劇を慰める、またその政治を憤りかつ諷刺する、そして抵抗文学へと運ばしめる。また平民に親まれる、百姓にも唱われる詩歌へと動かしてゆく。

だから、この時代の作者は、創意の場や対象によつて、無意識にその格調手法を変えていく。作者が統治当路者やほかの作者にたいして詠懐した場合は、おのずと古語を引いて「洸々であつて華靡」の詠みぶりが示されたが、身近かにある

子弟を教養づけるためや、わずかに文字を知つたばかりの田舎者に読ませるためには、俗語をもまじえて平俗な手法で書かれた。

それから門閥が幅をきかしたこの時代では、作者の著述業蹟はその門閥で継承される遺産でもあつた。門閥が所有した作者の文学は、その子弟教課のために必要な題材として用いられたことが多い。その場合にも、その後継者や家塾の指導者たち、ほかの小作者たちによつて、もと平易につくられた遺作にはそのままにしておくが、判りにくい作品には注明も加えられるまた平俗な読物とするために手を入れる、また作者を仮名して偽作することもその閥内では許されていた。この事情が、応璩の「百一詩」にも、彼の書記文学にも、程曉の詩句にも、また彼淵明の詩句や散文著述にもよく見られる。平俗であるからとて、かずかずの小理由を後世の校訂方式でならべ、仮名の偽作などと見決めることはできない。これはこの時代の平民文学が歩んだ動向でもあるから。

また詩歌には音曲を伴つて唱われた面もあるので、原作に擬した作品が「擬百一体」「効陶体」の名で後の作者たちで書かれ、それが彼らの詩集のうちに原作者の作として雑つてくることも往往ある。これには原句がもつ持味がなく、平俗なそしてたくらみのあとさえ露呈したものが多い。

鐘嶸の「陶淵明の詩源は応璩に出ず」――の説にたいする私の論考は、つぎの小篇「また晉の作者左思の風力に協力―について論考する」にうつる。本傳とこの二篇で、彼の文学の祖態、発生、展開の動向から歴史の過程に及んだのである。これを書きおわつてから彼の作品を評釈しながら彼の文学を概観する。そしてその文学性を評論する。それは私のしごとのはいりかたである。書窓には東山の花に狂うさわめきが傳えられ、陶窟の煙が立つている。私のしごとがようやく「陶詩源」の初歩、洞口のうちに入つた、序説にとりかかつたと云うところで拙句の一つ。

東風搔拍棹郎頭、何処桃源誌路求。
字字文心今古恨、一占山口使花愁。

――一九五四、三、二二